

日本語教材研究授業における日韓連携授業の効果

谷 誠 司・内 田 智 子

Effectiveness of cooperation in teaching materials for Japanese language education class between Tokoha University and Jeju National University in Korea

Seiji TANI・Tomoko UCHIDA

2014年11月21日受理

1. はじめに

本稿は、2012年9月～12月に、常葉学園大学と韓国の済州大学校との間で行われた日本語教材研究の連携授業の試みについて報告するものである。授業全体の流れに関しては、谷・内田（2014）「日本語教材研究授業における韓国済州大学との連携の試み」¹で報告した通りである。本稿では、常葉大学の学生が実際に作成した授業案の内容を紹介し、学生間での話し合いや模擬授業、教員からのコメントを通して、それらがどのように変化していったのかを見ていく。また、学生のレポートから、連携授業の効果や意義についても考えてみたい。

2. 全体の流れと提出課題

以下では、常葉学園大学の「日本語教材研究」（谷が担当）の授業で作成された「授業案」の紹介及び分析を行う。常葉学園大学の学生は、済州大学の「初級日本語会話」（内田が担当）の授業で使用するための授業案を、内田からの要望に基づいて作成し、模擬授業やフィードバックを通して授業案を改訂していった。

まず、内田から出した要望は以下の2点である。

- ・基本的な文法事項の確認＋話す練習（2種類程度）の構成にしてほしい。
なお、扱う文法事項は、多くの学生が他の授業で学習済みである。
- ・話す練習は、機械的なドリル練習にならないようにしてほしい。

次に、谷・内田（2014）で報告した中から、本稿で扱う資料と提出のタイミン

¹常葉大学外国語学部『研究紀要』第30号 pp.69-82

グ等を以下にまとめる。

9月25日：常葉学園大学での授業でグループ分けを行い、各グループ扱う文法課題を以下のように決定（表1）。文法項目は内田が提示した中から学生グループが選択。

表1：各グループ扱う文法課題

グループ	扱う文法
Aグループ	動詞の可能形（Vれる・Vられる）
Bグループ	形容詞
Cグループ	あげる・くれる・もらう
Dグループ	月・日・時間・曜日

10月2日：各グループ、大まかな授業構成や留意点を記した活動報告書を谷に提出。

10月9日／10月16日：模擬授業の準備。

10月23日：模擬授業（Aグループ・Bグループ）→教材・授業案を谷に提出。

11月6日：模擬授業（Cグループ・Dグループ）→教材・授業案を谷に提出。提出された教材・授業案を谷が内田に送り、内田が各グループにコメントをして返却。

11月13日：内田のコメントを読んで、再度グループで話し合い、修正の上で再提出

つまり、各グループ、初期段階での授業のアウトラインを示した「活動報告書」、それを具体化した「教材・授業案」を作成、修正を行うという手順を踏んだわけである。なお、「教材・授業案」に関しては、模擬授業時の「原案」、模擬授業の反省点を生かして修正を加えた「修正案」、内田のコメントを反映させた「再修正案」の3種類を提出させた²。

以下では、各グループの「活動報告書」と3種類の「教材・授業案」を参照し、内容の変化、学生たちの意識の変化を見ていきたい。

3. 扱う文法・説明内容に関する問題

各グループ、初期段階では、日本語教育文法に対する理解不足が見られた。以下、それらの具体的な内容、訂正のきっかけやタイミングをグループごとに示す。

²次節以降、これらをそれぞれ「活動報告書」「原案」「修正案」「再修正案」と呼ぶことにする。

3.1 Aグループ（可能形）

動詞の可能形を扱ったAグループは、活動報告書の段階で、IIグループ動詞の可能形を「Vれる」と記述した。これはいわゆる「ラ抜き言葉」であり、規範として教えるには問題がある。またIIIグループ動詞は「する→できる」のみを提示し、「来る」に対する言及はなかったため、教員側からこれらの指摘を行った。

それを踏まえた模擬授業時の原案では、IIグループの例は「答えます」→「答えられます」と、規範文法となっていた³。一方、会話練習ダイアログの中に「持ってこれますか?」「はい、持ってこれます」という例が見られ、IIIグループ動詞「来る」はラ抜き言葉となっている部分があった⁴。また、IIグループ動詞の練習問題に、Iグループ動詞の「開きます」があった。これらは模擬授業時に指摘があり、それらを反映させた修正案の段階ではほぼ文法的なミスはなくなっていた。

3.2 Bグループ（形容詞）

形容詞の基本を扱ったBグループは、文法的な面での問題はなかったが、変形規則などの説明がなく、授業の進め方に問題があった。これに関しては4.2で述べる。

3.3 Cグループ（あげる・くれる・もらう）

「あげる・くれる・もらう」を扱ったCグループは「くれる」の説明に苦労していた。活動報告書と模擬授業時の原案の段階では「くれる」は「私に・私のグループ（家族など）に」という説明をしていたが、模擬授業時に「もらう」と「くれる」の違いの説明がうまくできず、その結果、「修正案」に以下のような記述が加えられた。

- ・「もらう」は前から欲しい物を聞かれていた、または自分が頼んで誕生日の日にプレゼントされたときに使う。
- ・「くれる」は、何がほしいか聞かれていない、また自分は頼んでいない、でも相手が渡してきたとき（一方的に）に使う。また、「くれる」の時の「～に」のところは私のグループ
- ・「私や父、母、兄、姉、妹、弟」しか使えない。たとえば「私は友人にくれました」とは言えない。

「もらう」と「くれる」が同じタイプだと感じるのは日本語母語話者の発想である。移動の方向と格関係から考えれば、初級学習者にとっては「あげる」と「く

³ 原案では変形規則の説明はなかったが、これ以外のIIグループ動詞「覚える」「教える」等も全て「Vられる」の規範文法で統一されている。

⁴ 同じ会話の中で「来られますか?」「来られません」という例もあるため、「来れる」「来られる」が混在している。

れる」が同タイプであり、その差異の説明に主眼が置かれるべきであろう。しかし、このことに自発的に気づくことはできなかったようで、修正案提出後の内田の指摘と説明により、再修正案で矢印を使った板書計画とともに正確な説明が完成した。

3.4 Dグループ（月・日・時間・曜日）

月・日・時間・曜日を扱ったDグループは、文法や解説の上でのミスはなかった。「10分」の読み方が「じっぶん」「じゅっぶん」で揺れていたが、基本的には単語の暗記が中心の授業案で、変形規則等も問題にならないため、説明も省かれている。

今回活用練習がメインになる動詞項目を選択したのはAグループのみであったが、規範文法が定着していないことが気になった。現代日本語では「ラ抜き言葉」以外にも「サ入れ言葉」や「レたす言葉」などが方言とともに広く使用されている。これらをどのように扱っていくのかも日本語教師が考えるべき課題である。

また、Cグループのように、使用法が正しくても文法説明の段階で問題が見られることも多々ある。日本語が使えることとその文法が説明できることは次元の異なる問題である。今回、模擬授業時の原案に文法説明や変形規則が記述されていたグループはなかったため、原案作成時の学生の文法理解の程度を推測することはできない。文法規則は学習者にとって非常に重要なものであり、教案にそれが存在しないこと自体にも問題がある。次節ではこの点にも注目し、授業の進め方について見ていきたい。

4. 授業前半の構成

以下では、各グループの授業の進め方を見ていくことにする。内田からは、基本的な文法・語彙の確認のあとで、実際の会話練習・教室活動を2種ほど入れて欲しいという要望を出し、各グループ、その指示に従って授業を組み立てた。まず、授業の前半部分の構成、すなわち文法説明や語彙確認、簡単な変形練習等の内容を見ていきたい。

4.1 Aグループ（可能形）

このグループの模擬授業時の最大の問題点は、文法規則の説明がなかったことである。Iグループ「買えます」、IIグループ「答えられます」、IIIグループ「できます」を使用した導入会話が示された後、変形規則に関する説明がないまま各グループの変形練習問題へと進んでいる。この点は模擬授業時に指摘があり、修正案では、各グループの動詞の変形規則の説明が追加された。また、模擬授業時

には変形練習の次に拡張練習があるが、この練習がⅠグループ動詞が2種、Ⅲグループ動詞が1種で、Ⅱグループ動詞の練習がなかった。これも模擬授業時に指摘があり、修正案ではⅠ・Ⅱ・Ⅲグループ全ての練習が入った。

修正案ではほぼ問題は解消したが、再修正案ではよりわかりやすくしようという努力が見られた。修正案の段階では、導入会話と文法説明をⅠグループからⅢグループまで連続で扱った後で、グループ別の変形練習という構成だったが、再修正案では、まずⅠグループの導入・説明・変形練習、次にⅡグループの導入・説明・変形練習、というように一項目ずつ確実に理解させるという手法が採られた。

4.2 Bグループ（形容詞）

このグループも、模擬授業時には文法説明がなかった。活動報告書の段階では、留意点として「イ形容詞・ナ形容詞が混ざらないようにする」と書いていたが、模擬授業時には形容詞に2種あることの説明は見られなかった。授業はまず導入として「寒い」「暑い」の会話が見せながらの語彙確認へと進む。この語彙確認では12のイ形容詞のあとで4つのナ形容詞が示され、全てマス形で提示されているのだが、イ形容詞・ナ形容詞という区分に関する説明がないまま、マス形の形容詞を基本形にする練習、さらに否定形にする練習が続く。全てにおいて変形規則に関する説明はない。

この展開に関しては模擬授業時に指摘が行われ、修正案の語彙確認では、まず「イ形容詞」として、「寒い」「暑い」等13語が基本形で示され、その後に「ナ形容詞」として「静かだ」「にぎやかだ」等4語が基本形で提示されている。修正案・再修正案でも変形規則に関する直接的な説明はないものの、「寒いですー寒い」「静かですー静かだ」等のいくつかの例が示されている。否定形に関する説明及び練習は修正案以降には見られない。

続いて「赤い花」「静かな町」等の「形容詞＋名詞」の練習となるが、この部分に関しては模擬授業時に既にイ形容詞・ナ形容詞の区別がなされ、それぞれ例が提示されている。修正案もほぼ同じ形だが、その後の再修正案では板書計画と直接的な文法規則の説明が加えられた。

4.3 Cグループ（あげる・くれる・もらう）

前述のようにこのグループは、模擬授業時に「くれる」と「もらう」の区別がうまく説明できず、修正案で誤った説明が加わった。活動報告書・原案には間違っていたことは書かれていないが、文法理解が不十分であり、文型としての格関係の説明に注意が払えなかったことが原因であろう。

また、模擬授業時には導入会話で「あげる」「くれる」「もらう」の全てを一度に提示したことも問題だったようである。学生からの指摘の結果、修正案で「あ

げる・もらう」の説明・練習の後に、「くれる」を導入したことは評価できる。再修正案では、「あげる」「くれる」「もらう」の順に変わった。格関係・物の移動の方向が板書され、「あげる」と「くれる」の差を説明すると同時に、一つずつ確実に定着させていくという姿勢が見られた。

4.4 Dグループ（月・日・時間・曜日）

このグループは基本に則り、1時～12時の読み方、「○時○分」の形の読み方、「○時から○時まで」の練習、曜日の読み方、1月～12月の読み方を教えるという方法を使った。リピートコーラス・指名を繰り返し、読み方の定着を最大の目標としたように思われる。模擬授業時にも特に問題は見られず、原案と修正案はほぼ同じ形である。教員から見ても特に大きな問題はなかったが、基礎練習に時間を使いすぎていること、リピート練習の連続で単調になりがちなのが気になった。また、活動報告書には「7日（なのか）」「4時（よじ）」と読み方を注意する記述があったものの、模擬授業時とその後の修正案では特に注意は払われていない。修正案後に内田からこれらの点をコメントした結果、再修正案では基礎練習が大幅に削られ、時間に関しては注意すべき読み方（4時・9時など）の確認を中心とした説明に変わるとともに、時計の針を見て読む、時間を聞いて時計の針を書くといった練習が加わった。曜日・月・日に関しても、教えるのではなく、既習事項として順番に確認していく方法に変わった。

5. 応用練習の構成

次に、授業後半の構成を見ていきたい。後半は各グループ、会話練習を2種類考えた。アイデア自体はどのグループも修正案段階で固まり、修正案→再修正案では小さなミスを直す程度のものが多かった。

5.1 Aグループ（可能形）

このグループは「バイトの面接のロールプレイ」「バイト探し」の2種の活動を考えた。

模擬授業時のロールプレイではアルバイトの面接の典型的なダイアログを提示し、空欄に自分の状況を入れながら会話練習をするというものであった。ダイアログ中に「パソコンを使えますか」「ワードなら使えます」等の可能形が散見されるものの、空欄部は名前や曜日を入れる等で、可能形を考える練習にはなっておらず、模擬授業時に指摘を受けた。初級レベルにしてはダイアログの日本語が難しすぎるという意見もあり、修正案では使用する単語や表現がかなり平易なものに変わるとともに、空欄部が可能形・可能形の否定形を考えて埋める形になり、練習の質が向上した。

「バイト探し」の活動は、クラスメンバーをバイトを募集する人とバイトを探す人に分け、バイトを探す人は可能形のリスト（「英語が話せる」等）から自分の条件をチェックし、自分の条件と合致するバイト先を見つけるという形のものである。1つ目のロールプレイを生かして会話をするという点で、よく考えられた活動であった。

5.2 Bグループ（形容詞）

模擬授業時には、「会話のロールプレイ」と「探し物」という2種の活動が行われた。

ロールプレイは2種が用意され、まず単純に音読をするタイプ、続いて空欄部に自分のことを入れながら話すタイプのものが行われた。1つ目は単純すぎ、2つ目は空欄部に形容詞を入れる練習ではない点が問題という指摘がなされた。その結果、修正案では1つ目の会話練習は省かれ、2つ目は形容詞中心の空欄補充へと変わった。再修正案ではさらに形容詞の使用度が増え、会話自体も様々な形容詞が利用できる内容になった。

原案の「探し物」は、ペアで質問しながら隠したものを探すという活動だったが、これも形容詞の練習になっておらず、修正案では「引越し」という活動に全面改訂された。クラス全体を不動産屋と引越しする人に分け、「駅から近い部屋」「夜景がきれいな部屋」「広い部屋」等、「形容詞＋名詞」の形を利用しながら条件に該当する部屋を探すという活動である。こちらは修正案の段階でほぼ完成し、再修正案に引き継がれている。

5.3 Cグループ（あげる・くれる・もらう）

このグループは「物の授受」と「プレゼント決め」という活動を考えた。アイデア・方法ともに原案から再修正案まで変化はない。「物の授受」では、3人グループでメンバー2人が実際に物の授受を行い、残る1人が「AさんがBさんにCをあげました」などの説明をするという活動である。「くれる」は家族設定となっており、説明が不十分であった修正案までの段階では、学習者に混乱をもたらしたと思われる。「プレゼント決め」の活動は、まず学習者間で日本語で簡単なインタビュー（趣味はなんですか？等）をし、相手にあげるプレゼントを考える。それを「私はAさんにBをあげます」の形で発表させた後に、友人の発表から自分がもらうものを聞き取り「もらう・くれる」で説明するという活動である。作文・発話・聞き取り・文型の定着がバランスよく組み込まれた活動であった。

5.4 Dグループ（月・日・時間・曜日）

このグループは「〇月の行事」「旅行計画」を考えた。アイデア・方法ともに

原案から再修正案までほとんど変化はない。行事の活動は、クリスマス・入学式などの絵カードを使用して、それらが何月なのかを言わせるというタイプのものである。旅行計画は2泊3日の旅行計画として時間と場所を書いたスケジュール表を作り、あとで発表をさせるというものである。再修正案ではメモを取りながら発表を聞くという項目が加えられた。

また、再修正案では基本練習が大幅にカットされた代わりに、練習が一つ増えた。1つ目の行事の練習では月の読み方しか練習できないことを考慮してのことと思われる。1週間のスケジュールを書いて会話するというもので、曜日・時間を使う練習が組み込まれた点で評価できる。

6. 原案から修正案へ

以上見てきたように、授業の方法、文法説明等の点において、「原案」と「修正案」では変化が見られるグループが多い。この変化は「模擬授業」によるものである。学生が作成した教案は本来90分のプランであるが、授業時間の関係上、模擬授業は90分間で2グループを行った。各グループ30分の模擬授業+15分のフィードバックという構成を取ったため、実際の計画の3分の1の時間の授業となってしまったが、教案の変化を見る限り、模擬授業は有効な手段だったように思われる。

まず第一に、模擬授業時の原案の基本的な問題として、文法規則の説明不足が散見されたが、これらは修正案で大きく改善されている。直接的な指摘を受けて改善を行ったものが多いが、その一方で、日本語教育に対する自分たちの理解不足を認識したのも模擬授業であったと思われる。学習者役の学生たちの質問にうまく答えられないことや、説明がうまく伝わらないことを自覚し、それが修正案作成の原動力にもなったであろう。

また、学生には授業全体を通して数回内省文・感想文等のレポートを課した。模擬授業に関しては全員の学生が効果的であったと答えている。実際に授業をして初めて問題点が分かったという学生が多かった。学生の意見は以下の3点に集約される。

- ・実際に行くことで、手順・時間配分・自分の理解度等の問題点が明確になった。
- ・学習者の反応を見ることができ、学習者の目線で修正ができた。
- ・グループのメンバー間では気づくことができなかった点を授業後に指摘してもらえた。

模擬授業直後のレポートでも「学習者にしてほしいことがうまく伝わらなかった」「漢字が多くて読めないと言われた」「時間配分に失敗した」「使用したリアが教室で使うには小さすぎた」「学習者の質問に答えられなかった」「教材を

使用するタイミングに失敗した」等、様々な反省点が書かれ、それらを修正案で改善しようとする努力が見られた。

7. 修正案から再修正案へ

模擬授業の反省を生かした「修正案」に対しては、済州大教員の内田がEメールでコメントを返し、学生たちは「再修正案」を作成した。内田が特に重視したのは「済州大学の授業で使用した場合の問題点」である。谷・内田（2014）でも述べた通り、この教材は、済州大学の初級会話クラスで使用するという目的の下に作られたものである。現場の教員ならではのアドバイスをすることで、より現場の実態に即した教案になることを期待した。語彙コントロール、文法説明の内容、板書計画、予想される学生の反応等を中心にアドバイスを行った。その後の再修正案は内田のコメントを考慮し、全体的によりわかりやすく、学習者の立場を考えたものに変化したように思われる。

内田のコメントに対する学生のレポートには以下のような記述が目立った。

- ・現場の教員ならではの視点で、気付けなかったことを教えてもらえた。
- ・教案というものの書き方の不十分さが分かった。
- ・学生の反応や活動の雰囲気がより具体的にイメージできた。

再修正案提出の後に、4週間かけて実際に済州大学の1年生のクラスで授業を行った。再修正案の完成度はかなり高いものではあったが、現場の教員から見るとやはりそのまま利用するには若干問題があり、授業全体の構成・教室活動は再修正案に基づきながら、文法説明・基本練習等は適宜加えて授業を実施した。特に、教案の授業後半の教室活動に関しては学生たちも非常に楽しそうに取り組み、楽しみながら文法の定着が図れたよい授業となったように思う。教案がなく内田が新たに加えた練習や、学生から出た質問、学生の反応に関しては各グループにEメールで伝え、フィードバックを行った。

8. 連携授業の意義

今回の連携授業のポイントは、以下の2点である。

- 1) 実際の授業で使ってもらえる可能性がある教案を制作する。
- 2) 授業担当者以外の現場の教員からのフィードバックがある。

これらのことによって、動機付けが高まることを期待し、今回の連携授業を計画した。授業後のレポート課題を見る限り、この目標は達成できたと思われる。

「実際の授業で使ってもらえる可能性がある」ことに関しては、以下のような記述が見られた。

- ・対象となる学習者が明確なので、教材作りをする際に目標が立てやすかった。
- ・やる気が出た／責任感ができた／真面目に取り組んだ。

- ・学生が間違えやすいポイント、学生が楽しめる授業等、学生目線の教案が作れた。

「現場の教員からのフィードバック」に関しては前述の通り、現場ならではの声が聞けてよかったという意見が多かった。また、日本語教育では「ニーズ分析」「レディネス調査」等の重要性が説かれるが、今回の連携授業でその大切さが分かったという意見もあり、より大きな視点を持てたという効果もあったようである。

一方で、以下のような問題も提起された。

- ・「活動報告書」を作成する意味があまり感じ取れなかった。
- ・グループ単位で教案作成、模擬授業をしたが、済州大学では教員が1人である。
- ・授業時間外で課題の相談をしたい時に、グループ全員が集まるのは難しかった。
- ・済州大学で「授業を受けた学生の声」も聞いてみたかった。
- ・修正した教案でもう一度模擬授業をする機会があってもよかった。

確かに学生が提出した「活動報告書」は形式的なもので、クラス内でコメントをする機会を持ったもののあまり意見も出ず、その後の授業案作成との関連性が低くなってしまった点は残念である。全体的なスケジュールや方法についてももう一度見直し、より効果的に力をつけるような授業を考えていきたい。